



岡野浩著 『日本的管理会計の展開：「原価企画」への歴史的視座』 中央経済社、1995年

國部，克彦

(Citation)

経営研究, 46(3):115-116

(Issue Date)

1995-11

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90004716>



【書評】

岡野 浩著『日本の管理会計の展開 —「原価企画」への歴史的視座—』中央経済社、1995 年

國 部 克 彦

現代が変化の時代であることに異論を差し挟む人は少ないであろうが、それでは、その変化とはどの程度のもので、どのような方向への変化なのかという問題になると、それに十分な解答を与えることはまさに至難の業であろう。しかし、われわれ研究者は、この至難の課題を前にして、通り一遍の回答を与えることで満足するのではなく、この問題を真剣に考え抜いてゆく努力を継続しなければならない。

そのためには、過去の学問的伝統にとらわれず、利用できる方法論を食欲に取り込み、分析枠組みの拡充とそれによる隠された論点の発掘が不可欠となる。ここで取り上げる岡野浩氏の著書は、管理会計の領域において、このような課題に真剣に取り組んだ業績である。

管理会計も、他の社会科学分野と同様に、大きなパラダイムシフトの波に洗われている。その動向も様々に分岐するが、その中で岡野氏が特に注目する側面は、ひとつは1987年にジョンソン＝カプランによって問題提起された管理会計の適合性の喪失と、その後のABC・ABMや原価企画に代表される管理会計の理論および実践の新展開であり、もうひとつはホップウッドらによって開拓された社会理論としての会計研究という方法論的な側面である。そして、これらの動向に加えて、岡野氏が自身の歴史研究から得た知見と、日本の管理会計の研究から得た知見を組み合わせるまとめあげたものが本書である。したがって本書では、大別すれば、その方法論的側面は「管理会計の歴史的視座」として第Ⅰ部に、その実践的側面は「日本の管理会計の構想」として第Ⅱ部にまとめられている。

第Ⅰ部では、岡野氏が研究生生活をスタートした当時から取り組んできた管理会計史に関する研究がベースとなり、それに加えてフーコーによる歴史研究の方法論を管理会計研究に導入することの意義を論じている。このフーコーの方法論は、ホップウッドを中心とするグループが会計研究の領域へ導入したことを契機として、会計の代替的研究アプローチを志向するスクールの間で大きな注目を集めたものだが、岡野氏は社会的コンテクストから現象にアプローチするフーコーの方法論の重要性を認めながらも、現象の説明理論に終始するフーコディアン立場には批判的であり、「「外からの会計学」をいかにして「内における会計学」に読み替えていくかが肝要となる」(p. 64)と主張し、この指摘を第Ⅱ部でさらに展開しようと試みている。

第Ⅱ部では、日本の管理会計が主題となるが、そこでの鍵概念を評者の観点から抽出すれば、会計の「可視性」と「不可視性」、「実体管理」と「会計管理」、「計算システム」と「マネジメント・システム」、会計機能の「分散化」と「統合化」というところであろうか。これらの用語の使用から明らかなように、岡野氏の思考は常にひとつの対象を表裏両方の側面からみようとしており、特に、貨幣尺度を中心とする「会計管理」と物量尺度を中心とする「実体管理」の相連を、会計の「可視性」と「不可視性」に結びつけて解釈し、この点に日本の管理会計の特質を認める点に岡野氏の管理会計論の特徴があると考えられる。

すなわち、岡野氏の言葉を借りて要約すれば、「日本の管理会計の特質は、まさに会計の不可視性の側面を強調し、JITやカイゼン活動などの

実体管理を無視するだけでなく、原価企画との併用によって不可視性を源流管理のプロセスのなかで逆用するところに求められる」(p. 105) ということになる。

さらに、管理システムを、標準化および海外移転が比較的容易な「計算システム」と、組織や社会の文化的要素に規定される傾向の強い「マネジメント・システム」に分けて、複合的な経営管理技術である原価企画を論じようとしている点も、日本の管理会計の海外移転が重要な課題となっている今日において注目すべき観点であろう。この点を会計機能との関わりでみた場合、「マネジメント・システム」としては会計機能の「分散化」が進んでいるものの、「計算システム」としては「統合化」されているという岡野氏の主張も会計機能の二重性を捉えた指摘としてさらなる考究に値するポイントである。そして、最後に岡野氏は、管理会計を「コントロール的役割」から「行動作用因」あるいは「創発的役割」への重点移行として捉えることを主張して同書を結んでいる。

岡野氏の著書は、このように管理会計を研究するものが今後考え続けてゆかねばならない多くの貴重な論点を提供している。従来の管理会計関係の著書は、ともすれば機能合理性中心の平板な議論に流れがちであったが、岡野氏の多元的な視座はそのような伝統的な管理会計研究では不可視のままであった領域のいくつかを明らかにしたと評価することができるであろう。

伝統的な研究では、研究の視点を固定して、そこからできる限り深く考えることが求められてきた。しかし、現代のような変化の激しい時代に、研究の視点を固定してしまうことは同時にかなりのリスクも伴うことになる。したがって、視点を固定するよりも、むしろ機動的に視点をずらして様々な角度から現象に迫ることが何よりも必要とされるであろう。特に、企業経営のような高度に複合的な現象を対象とする際には、このような研究姿勢は大切であり、岡野氏の研究はまさにそれを体現しようとしたものと言えよう。

しかしながら、多元的な視点の採用は必然的に多元的な論点の摘出を伴い、その論点ひとつづつ

について一層深い考究が必要とされることは言うまでもない。岡野氏の著書は、「歴史的視座」という副題からも明らかのように、個別の論点の究明を目的としたものではなく、論点の摘出を目的としたものと理解すべきであろうが、氏が摘出した論点の一層の解明を期待するのは評者だけではないであろう。特に、先に示した第Ⅱ部に展開されている鍵概念に関しては、より一層の実践的調査に裏付けられた理論展開を望みたいものである。

最後に、評者から著者に一点だけ質問を投げ掛けさせて頂こう。岡野氏は「序」において、「「世界標準」としての管理システムを志向するための準備作業として、「差異」の側面を明らかにしたい」と述べており、また、第5章の冒頭(91頁)でも「世界標準」という語を使用している。しかし、この「世界標準としての管理システム」とはいったい何を意味するのであるだろうか。かつての「フォード・システム」や「JITシステム」などを念頭に置いて、新しい世界的に適用可能な管理システムを志向されようとしているのか。それならば、岡野氏が摘出しようとしている「差異」の部分は究極的には解消されるべきものなのであるだろうか。

しかしながら、岡野氏自身が著書の最後のパラグラフにおいて表明しているように、「共通の「海図」は存在しない」(p. 151)のであれば、「世界標準」を志向することは最早不可能なのではなかろうか。世界標準よりも「差異」の存在を大切にして、それを社会や組織に根ざした固有の文化的アドバンテージとして、その戦略的展開を図るべきではないのであろうか。これは、岡野氏の業績の評価とは全く別次元の評者の研究者としての疑問であり、今後論稿の形で議論できれば幸いである。

(評者・神戸大学経営学部助教授)